

学生会員の

声

●好奇心を育む●

いつもの通学路、自転車をこぎ風をきる。昨日より風があたたかい。春が近づいているのだ。節目の季節がそこまで来ている。ふとこのキャンパスに通い始めた頃の記憶がよみがえる。高校を卒業し希望で胸がいっぱいだった頃、上京して右も左も分からないまま大学生活を始めた頃。そして、もうすぐ新年度を迎えようとしている今。大学生活も早いもので、6年が経とうとしている。

時々、なぜ、今ここにいるのかと考えることがある。

私は幼い頃から動物や植物が好きで、家の裏には畑や畦道で見つけた雑草を植え庭をこしらえていた。集まってきた昆虫を観察しコピー用紙の裏で図鑑を作り、四季の移ろいでページが増えることを喜んだ。山や川、海で遊ぶことも好きで、太陽が昇り雲が流れ、星が瞬く空の下で、いつまでも遊んでいたと思っていた。

転機は中学生のときに訪れた。いくつになっても自然の中で暮らしたいと思っていた私は、総合学習の授業を通して何が地球環境を脅かし、何をしなければならぬのか知ることとなった。そして、ただ自然を愛でるだけでなく、自然を守るための仕事に就いてみたいとぼんやり考えるようになった。

高校生になり進路を考える中で、文理選択は迷わなかったが、理科の科目選択には時間がかかった。好みの分野で言えば生物だったが、化学に惹かれた。好みを取るか、興味を取るかで悩んだ結果、化学を選択した。生物を好きな人間が化学をやるのも面白い。化学を深く知ることで自然環境を守れるようになるだろうとも考えた。

教養学部時代は、関心の高い講義が多く、心が弾んだ。海洋、地球惑星、地域生態、エネルギーに関するいくつかのオムニバス講義に出席し、先生方が何を問題として捉え、どのような研究を進めているのかを知った。

その中でも特に魅了されたのは、エネルギー分野だった。現在の暮らしにエネルギーは欠かせないが、エネルギーの取り出し方やその資源量を考えると、将来には全く新しいエネルギー形態が開発されているかもしれない。生活するうえで必要不可欠なものであるうえに、最先端の技術や知識が投入されている。

初めて化学工学の名前を聞いたときには、その言葉の意味がピンと来なかった。化学工学はプロセスを設定し、物質とエネルギーの取支関係を導き出す。プラントなどの装置の設計や製品の生産を考えるうえでは必要不可欠な分野である。この考え方をを用いて、エネルギー変換を伴う環境問題や省エネルギーなどに応用されている。システムをプロセスに分けて考えることは、そのシステムをより深く理解することに役立つ。人はすでに大きなシステムの中で生きているのだから、俯瞰力だけでなく小さなプロセスに焦点を当てる力も必要だと感じた。

化学システム工学科に入ってから、中温作動型燃料電池の電極触媒の研究に携わってきた。最初は何をすればいいのか、また何をどう考えればいいのか見当もつかないところからの出発だった。そのうち、研究内容に講義で習ったことを活かすことができるようになり、少しずつ自信となった。何が問題か考えること、仮説が正しいか地道に努力し続けること、時には立ち止まって軌道修正すること。このサイクルで研究を続け、成果を卒業論文としてまとめたときの高揚は、鮮明な記憶として未だ残っている。

そして、小さくではあるが前進した修士課程を経て、春からは博士課程へ進学する。これからの社会では、誰も考え付かなかった、または成し得なかったことを達成することが一層求められるだろう。誰かがやらなければならないなら、私がやりたい。問題を提起し、その解決手段を手探りで探していく過程が心地良いのだ。

新たな研究環境は自然に恵まれた場所にある。また、環境をテーマに掲げる研究室が数多くあり、興味をそそられるような森林や海底での研究が身近なところでおこなわれていることも見逃せない。

これから先、どのような道を選ぶのか、今はまだ見えない部分が多い。だが、どのような道を進んでも、庭の雑草が花をつけた日やカマキリの卵が孵化した日の思い出を大切にしつつ、化学の世界を楽しみたい。そうして進んだ道の先でふと、何者でもない今の自分を思い出したいものである。

(東京大学大学院 新領域創成科学研究科 環境システム学専攻
田島星也)